

## SNS における透明性の錯覚

東京大学大学院 綿村英一郎

### 背景

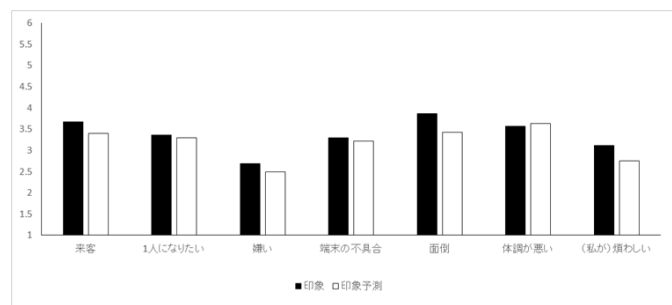
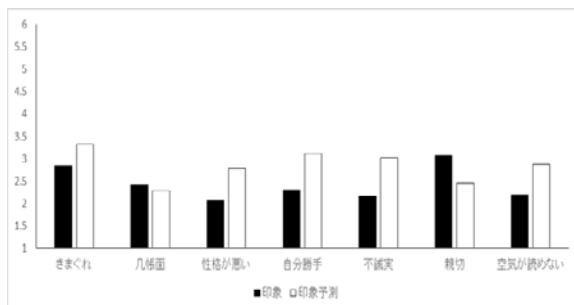
SNS 依存を強める背景の 1 つに、メッセージを読んだにも関わらず返信していない状況、すなわち既読無視に対する不安感がある。しかし現実的には、受け手が察するほど送り手は既読無視に敏感ではない可能性もある。本研究では、「透明性の錯覚」と呼ばれる、対人関係における過度の見透かされ感を SNS 上のコミュニケーションに適用し、2 つの実験を行った。実験 1 では、参加者を 2 群に分け、対面でコミュニケーションを行った条件と（SNS の代表格である）LINE でコミュニケーションを行った条件とで、透明性の錯覚量にどれほど違いがあるのかを検証した。実験 2 では、インターネット実験により、実際に LINE を使っている参加者を対象に、既読無視をした、あるいはされた場面を想定させ、どのような印象評価や原因帰属をするのかについて検証した。

### 実験 1

都内の大学生 236 人を対象に集団実験を行った。LINE 条件では対面せずに LINE のみで、対面条件ではグループで輪になり実際に対面した状態で、それぞれいくつかのグループに分かれて 10 分間のコミュニケーションを行わせた。実験の結果、透明性の錯覚は対面条件では生じなかったが、LINE 条件では生じていた。LINE による文字情報等だけからでは透明性の錯覚が生じにくいという本来の予測に反し、実際には対面しているとき以上に錯覚が生じているということが明らかになった。

### 実験 2

実験 2 では、15～39 歳までの LINE ユーザー 235 人を対象に行った。ユーザーを「既読無視した場合」と「無視された場面」のいずれか一方のシナリオを想像し、印象評価および原因帰属についての各項目について回答させた。実験の結果を端的にまとめると、無視した場合とされた場合で**非対称性**が示された。下左図のとおり、ネガティブ 5 項目すべてにおいて、自身が既読無視されたときよりも、相手の LINE を既読無視したときに相手が自分に抱くであろう印象悪化を高く予測することがわかった。一方原因帰属については、自分が LINE で既読無視をされた場合には、相手の端末不具合や体調が悪かったからなどやむをえない理由を想定せず、「返信が面倒だったから」、「自分が煩わしかったから」というように、ネガティブな理由を邪推しやすいということがわかった（下右図）。



### 考察

本研究の結果から、SNS におけるコミュニケーションにおいても透明性の錯覚現象が生じることが明らかになった。このことから、SNS ユーザーは顔が見えない SNS 上の自己表現に対して臆病であり、自分の内情が相手に悪く伝わっていることをかなり懸念しているということが明らかになった。しかし、自分が無視された側に立てば、それほど相手をネガティブには考えていない。その非対称性こそが既読無視への不安感を生んでいるということが示唆された。